4・5 歳齢児童のお絵かき場面における交互交代行動の分析

元井 桃

【背景と目的】交互交代(turn taking) とは、2人またはそれ以上の人数で、ある行動の実行者が順番に入れ替わる対人的相互作用のことである（近藤・山本, 2013）。対人的相互作用に影響を与える様々な要因は、実行機能や心の理論の発達といった児本人の「社会的能力」、性別や月齢といった「個体特性」、そして他児や環境との「関係性」の3つに分かれると考えられる。そのため交互交代に関しても、これら3つの要因が、交互交代行動に影響を与えるのではないかと想定され、検討する必要がある。しかし、交互交代に関する研究は、交代回数に着目したものや事例研究がほとんどで、交互交代行動の方略を得点化して、それらの要因との関連を検討した研究はほとんど見当たらない。そこで本研究の目的は、「他者配慮と自己欲求の抑制ができているか」という基準で交互交代行動の方略を得点化し、交互交代行動に影響を与える要因を検討することとした。

【方法】大阪府内のこども園の4・5歳齢児クラスに所属する38名（男児22名、女児16名）を研究協力児とした。協力児の平均月齢は59.87カ月であった。本研究では2人1組の同性ペアで、設定したお絵かき場面における交互交代課題を行った。また、協力児の社会的能力の測定として、誤信念課題、DCCS課題、絵画語い発達検査を1人ずつ行った。

【結果・考察】①協力児の交互交代行動：「実行者主導交代」と「待機者主導のスムーズな交代」の合計生起回数の平均が「待機者主導のスムーズでない交代」と「未交代」の合計生起回数の平均より有意に多いことから、4・5歳齢児は、自分が遊びたい気持ちよりも、相手に譲ってあげようという気持ちを優先することの方が多いことが示唆された。②交互交代行動に影響を与える要因：重回帰分析の結果、月齢が交互交代得点を有意に説明していることが分かった。月齢が高いと言語能力が高く、コミュニケーション能力に長けているため、他者配慮のある交代ができる、ということが理由として考えられた。③課題開始からの経過時間と交互交代行動：序盤は中盤と終盤に比べて交代回数が多いことから、4・5歳齢児において序盤は相手に配慮して短いスパンで交代をするが、中盤以降には、ペンを独占する傾向にあることが示唆された。この理由としては、序盤は様子見でこのお絵かきシートがどのようなものかを試し、少しかいては待機者にペンを渡すということが多いことが挙げられた。また、序盤は自分の独占したい気持ちを我慢して頻繁に交代していた児も、時間が経過するにつれて我慢ができなくなり、だんだんと一回当たりの所有時間が長くなったという理由も考えられた。④ペア内での交互交代行動の関連：ペンの先行所有児の交互交代得点と後行所有児の交互交代得点に正の相関があったことから、ペア内での先行所有児の交互交代の方略と後行所有児の交互交代の方略は類似すると考えられた。これは、交互交代得点においてペアの相手の影響を強く受けているということである。このことから、ペアの交代の方略が先行所有児の交代の仕方によって決まり、お互いがその方略に基づいて交互交代を行う、もしくは後行所有者が待機者としての振舞の方略を築き、その後は 2 人ともその方略に影響されることが示唆された。⑤交互交代行動の性差：交互交代行動を性別で比較すると、交互交代得点は女児の方が男児よりも高く、交代回数は女児の方が男児よりも多い。そして、ペア内でのペンの累積所有時間と交互交代得点の差は女児の方が男児よりも小さい傾向にある。このことから、全体的に女児の方が男児よりも相手の意図を汲んだ交代をし、ペア内での平等性を保つ傾向があることが示唆された。つまり、女児の方が、高度な関係調整を行っていると考えられた。（比較発達心理学）